



HOKKAIDO
ARTS FOUNDATION
財団法人 北海道文化財団

北 の と び ら No. 83



▶ 座談会 北海道の若手演劇人は何をめざすのか ▶ インタビュー 井手茂太
加藤浩嗣 / 弦巻啓太 / 南参 / 橋口幸絵

北のとびら


No.
83

Contents

- 3 アートギャラリー (第14回)
高 幹雄 (画家)
- 4 インタビュー
井手茂太 (振付家・ダンサー)
- 6 座談会
北海道の若手演劇人は何をめざすのか
加藤浩嗣 / 弦巻啓太 / 南参 / 橋口幸絵
- 10 地域からのお便り
東川町・剣淵町
君の椅子プロジェクト

英国バクストン市
札幌市こどもの劇場やまびこ座
バクストン国際人形劇フェスティバル公演
- 12 素晴らしき短編映像の世界 (第2回)
「短編映像のフェスティバル」 久保俊哉
- 14 この街 この人 (第10回)
当別町

平成21年11月発行 / 財団法人北海道文化財団
<http://www.haf.jp>
デザイン / 株式会社アウラ

 資源の保護と環境への配慮を考え、
本紙には古紙100%の再生紙、
インクは大豆油インクを使用しております。

From COVER

文：見玉源太郎 / 写真：原田直樹

「現代狂言」

2009年8月14日(金)
小樽市民会館 大ホール

奈良時代に中国から伝来した散楽が日本古来の芸能的要素と結びつき、室町時代に確立されたと言われる伝統芸能の狂言。現代狂言とは、その古典狂言の舞台や様式、所作に、現代の言葉遣いや衣装などをコラボレーションさせたもので、2006年に狂言師の故野村万乃丞(8代目野村万蔵)を発起人に旗揚げされました。3年目を迎えた今回、初の北海道公演が実現し、「旧岡崎家能舞台を生かす会」の主

催で行われた小樽公演では、ステージの背景には原寸大で写真複製した旧岡崎家能楽堂の「鏡板」を配置。佐渡に狐がいるかいないかで越後と佐渡の百姓が問答する古典狂言「佐渡狐」や、それを現代風にアレンジした「東京パンダ」、そして、パソコンのバーチャル世界を舞台にした新作「サードライフ」の3つの演目が上演されました。



写真協力: 萬狂言

表紙より / 平成21年度アートシアター鑑賞事業

対象とまっすぐに向き合う無垢なる魂



「私は何も知らない」(727mm×606mm／キャンバス、プリント、アクリル絵具／2008年)



画家
高 幹雄
TAKA Mikio

1978年北斗市生まれ、札幌市在住。日本はもちろん、ハンブルク、ニューヨーク、上海などでも活動。2004年ハンブルク州より奨学金を受け滞在制作。2005年モンブラン文化財団が作品を収蔵。2006「VOCA展」出展。2009年、上海での道内作家の合同展「雪国の華-N40°以北の日本の作家」へ参加。

子どものころから遊びの中で自然と絵を描いていた高さん。コラージュした写真の上にアクリル絵具を塗り重ねていく現在の手法も、偶然手にした花の写真を使って遊ぶうちに発見していった。

描くという行為を純粋に楽しんでいたころの感覚に立ち返ったとき、「自らを制約すること」から自由になった。「考えたり悩んだりして描くと作品自体に現れてくる。意図して描いた線は見えて心地よくない」

2008年の「私は何も知らない」をはじめとする、バラやシャクヤクなどの花を描いた作品が代表作。好きなモチーフとまっすぐに向き合い、感じるままに描かれた作品を前にすると、見る者にもその外連(けれん)のない無垢な思いが伝わってくる。

合同展「インフメーション」
札幌美術館「真冬の花畑」
2009年11月29日(日)～2010年1月31日(日)
札幌芸術の森美術館

同時多発的に展開される動きの面白さを感じてほしい

北海道文化財団のアートゼミ2009で、昨年引き続きワークショップの講師をつとめる、振付家でダンサーの井手茂太さん。日常の何気ない身振りを取り入れたユニークなダンスで国内外から注目を集めています。作品がどのように生み出されているのか、また今回のワークショップで伝えたいことについてお話をうかがいました。

踊ることへの憧れは 幼少時代から

踊りに興味を持ったのは、子どものころ。二人の姉が、それぞれクラシックバレエと日本舞踊を習っていたのが影響しています。ただ、僕は両親に許してもらえず、実際にダンスを習ったのは高校を卒業してからでした。ダンスの専門学校で基礎技術をひと通り学び、ヨーロッパに住む友人を訪ねては、多くのワークショップやダンスのレッスンを受けました。そして、帰国後に、自分のダンスカンパニー「イデビアン・クルー」を立ち上げたんです。僕の作品は、ステージ上でたくさんの方が同時多発的に別々の動きをしなから、一つの作品としてリンクしていきます。その少し変わった作風にも、子どものころに培われた経験が反映されているのかもしれない。姉の稽古や発表会を何度も見るうちに、主役より隅にいる人に目がいくようになって、「この人をこうしたらいいのに」、「あの人をセンターにしたら面白いのに」と、いつも考えていたのが今、作風となって現れているのだと思います。

動く楽しさ、表現する 面白さを感じてほしい

国のアーティストとも一緒に仕事をする機会が増えました。そこから、とてもいい刺激を受けています。今年3月の「フェスティバルトーキョー」では、タイ人のダンサーと一緒に「コウカシタ」という作品を創ったのですが、彼らの楽観的な性格は、僕にこだわりすぎず、気持ちを緩めることも大事だということを感じてくれました。さらに楽しい雰囲気だと、人は変わるし、作品も変わる。それが観客にも伝わるというのを改めて痛感しましたね。

産休、そして今後のこと

「イデビアン・クルー」は2009年8月の「挑発スタア」の公演をもって一時活動を休止しました。カンパニー作品は、ほぼ1年に1〜2本のペースで発表してきましたが、いったんここで充電期間をおき、じっくりあたためてから作品づくりをするための、いわば「産休」のようなもの。

振付家としては今まで通り、外部の作品などで発表していく予定です。別のカンパニーやダンサーと一緒に作品を創ることも、いつかチャレンジしてみたいと思いますね。

僕は回転寿司のくるくる動く様子が好きで、ダンスも同じだと思うんです。見て難しいものではなく、たくさんの方が動いている様子が面白い。それにダンスをするのだから特別な素養は必要なく、とにかく身体を動かしてみればいい。たくさんの人と出会ったり、いろいろな角度から物事を見たり、そういう経験が身体を通して表現されるのがダンスです。ダンスって楽しいものだというのを、今後も多くの人に伝えていきたいですね。

井手茂太 (いでしげひろ)

1995年にダンスカンパニー「イデビアン・クルー」を旗揚げ。カンパニーの作品発表をベースに、演劇作品への振付やステージング、PV・CMの振付など、幅広いジャンルで活動する。日常の中に紛れ込む、ふとした身振りや視線を丁寧に抽出しつつ、出演者の個性を最大限に活かす独自の振付手法は、表現媒体のジャンルを問わず、国内外から高い評価を得ている。また、ダンサーらしからぬ体型で繰り出される、しなやかで弾力のある動きは観る者の目を離さず、ダンサーとしての注目度も高い。近年では、椎名林檎ライブ「林檎博'08」の振付、夏木マリによる印象派NEO「わたしたちの赤ずきん」の振付、こまつ座&ホリプロ公演「組曲虚殺」(作=井上ひさし、演出=栗山民也)の振付・ステージングなどがある。

井手茂太プロフィール詳細 http://www.match-point.co.jp/m_ide.html



「振付家・ダンサー」

井手茂太

SHIGEHIRO Ide

それぞれの個性が
映える動きを創り出す

僕の作品は、まず空間を見て、そこから発想して創っています。たとえ「排気口」という作品では舞台を見て、「ここに旅館を作った大勢の仲居さんが踊っていたら面白いな」という想いからスタートしています。空間を決めたら、今度はイメージに合う音楽をじっくり時間をかけて選ぶ。そして、空間、音が決まった上で振り付けを行います。僕の振り付けは動きを指定することがほとんどなく、むしろダンサーの動きをじっと観察して、何もない仕草やクセを見つけてはそれを取り入れていく。あるがまま見せた方が、より人間らしい動きになるし、個性も出てくる。何よりその人自身の、映える動きになるんですね。

ここ数年、作品を通してさまざまな人と出会い、ジャンルや文化の異なる

のワークショップの大事なところ。お客さまには、作品になる一歩手前のパフォーマンスを見てもらおうと思っています。鑑る人は「ここから作品が生まれていくんだ」と感じ、参加者にも純粹に動くことの楽しさや表現することの面白さを感じてもらえればと願っています。



北海道文化財団アートゼミ2009

井手茂太 ダンスワークショップ

道内で舞台芸術や美術等に関わる創作・表現活動をしている方又は志している方を対象とした少人数制の養成講座です。今回は振付家・ダンサーの井手茂太さんの指導で、9月5日(土)～11月2日(月)まで全7回のダンスワークショップを行い、最終日11月3日(火・祝)に参加者によるパフォーマンスを行いました。

Étoile

北海道の若手演劇人は何をめざすのか

加藤浩嗣

弦巻啓太

南参

橋口幸絵

今、北海道の演劇界に吹く大きな風。それは劇団の単独全国ツアーであり、劇場が主体となった地方交流というような、数年前とは違う新しい形として、その動きは全国から注目を集めています。今回は劇評ブログを主宰する加藤浩嗣さんと道内の若手演劇人が、道外との交流で感じていること、どこに向かっていこうとしているのかを語っていただきました。

NANZAN
「yhs」代表 <http://yhsweb.jp/>

TSURUMAKI Keita
「弦巻楽団」代表 <http://www.t-gakudan.com/>

今、一陣の風が吹いている

加藤 取材などを通じて、TEAM NACSが北海道発のユニットとして全国公演で活躍するなど、道内の演劇界に、一陣の風が吹いていると感じます。

南参 「TEAM NACS」の活躍は奇跡的な例ですが、夢を与えてくれたと思います。それに最近ホール・劇場や支援団体などの意識が高く、10年前と比べて道外公演などもしやすい環境が整ってきた印象を受けます。そうした面でも非常にいい風が吹いている。

橋口 道内在住の演劇人がいるような賞を獲ったり、道外の業界や演劇に勢いのある地域から評価されることも増えましたね。

弦巻 道内自体をみていると、演劇の盛んな地域なのかな？

加藤 自分では感じていなかったけれど、道外の人たちからは「札幌は盛んでいいよね」とよく言われます。確かに劇団の数は多いですよ。

加藤 札幌だけでも80以上の劇団やユニット、単発の団体などがあるみたいですね。

弦巻 北九州の劇団「飛ぶ劇場」の泊篤志さんは「札幌には演劇をやりたい人たちがいっぱいいて、劇場・ホール・団体そして若者が盛り上がっている極めて異例ないいマチだ」と評価されていました。

南参 九州には、その地区で活躍する劇作家の作品を公募して審査する「九州戯曲賞」などもあって、盛んに思えます。

加藤 東京からの距離が九州と北海道は変わらないけど、歴史がないかわりにしがらみが無く、すこくインディペンデントな存在に見えているようです。

橋口 九州、大阪、名古屋といった演劇の盛んな地域は、「戯曲賞」などがそろって自己完結できている。でも、北海道はいい意味で足りなくて、道外の盛り上がりが出張って行くしかない。そんなところから、しがらみのない自由な地域性が生まれたんでしょうか。

HASHIGUCHI Yukie
「劇団千年王国」代表
<http://sen-nen.org/>

KATO Hirotsugu

劇評ブログ「シアターホリック」主宰 <http://ham-pro.seesaa.net/>

マチが変わるとお客さんも…

加藤 皆さんもこれまで全国各地の劇団と交流していますが、そうした違いを肌身に感じました？

橋口 2007年度に福岡の劇団「万能グループ ガラバゴスダイナモス」の川口大樹さんと一緒に脚本を書き、札幌で僕らが、福岡で川口さんらがそれぞれ公演したのですが、同じ脚本なのに芝居のテンポが全然違って驚きました。

加藤 上演はどっちが先だったの？

橋口 福岡の方が早かったです。福岡のお客さんは、感動するためではなく、芝居を娯楽の一つとして楽しみに観に来ているんですよ。「すごく明るく、いい」感じで来ているのを見て、土地柄というのがあるのを初めて知りました。

加藤 東京へ行ったことで周りを見る目が変わりました。「こまばアゴラ劇場 冬のサミット」に参加したのですが、マチが変わるとお客さんのタイプも空間や時間まで全然違うんですよ。

橋口 どんなふうに違ったのかな？具体的に教えてくれる？

加藤 同じ喜劇を演じて、札幌では周りを気にしてか、お客さんがなかなか笑ってくれなかったんです。ところが、東京ではみんな声を出して笑ってくれたんです。あまりにも反応が違ったので、最初は軽いカルチャーショックを受けました。

橋口 初めて東京で公演したときには反応が違っていてびっくりしました。

加藤 楽しかったら笑うし、つまらなかつたら寝てしまふ。見ている人たちがすごく、個々のスタイルをもつて作品を選び、楽しんでいる。感じなんです。南参さんの言う土地柄というのが、演劇を創る側、観る側とも、地域ごとの経済や環境など、さまざまな要素で形成されているのを知れて新鮮でしたし、視野が広がりました。

橋口 交流を通して多くの人と出会えたのもうれしかった。道内では同世代の女性の演劇人になかなか出会えなかつたけれど、福岡で「空間再生事業

劇団GIGA」の山田恵理香さんと知り合い、こんなに話の通じる人が世の中にいるのかと感動しました。

物理的な距離ではなく、心の近い人たちと一緒にやる世代

橋口 大阪で公演できたのも実は東京での「若手演出家コンクール」がきっかけで、観客として来ていた劇場関係者に声をかけていただいたんです。

加藤 道外で公演することで、そうしたほかの地域とのつながりも増えてきた感じでしょうか。

橋口 はい。「劇団GIGA」の菊沢将憲さんが「イ



ンターネットも普及し、僕らは物理的な距離ではなく、心の近い人たちと一緒にやる世代なんだろうね」と言っていたのです。そうした心意気や北海道文化財団などの支援体制が整ってきて、今までの交流とは異なる意識が生まれてきていると思います。

加藤 最近道内でも役者の貸し借りやユニットなど、劇団を離れての交流が増えてきています。そこにも道外との交流で培った経験が関係しているのだと思うんだけど。

橋口 私たちの世代は仕事が終身雇用の時代ではなく、劇団でも同じ所に属するだけではなく、いろいろなところに参画する傾向にあるんです。



南参 演出家として客演をお願いするのは、閉じこもりたくないという意識もあります。新しい人と一緒に作品づくりをやることで、自分の考えている手法がほかの劇団員にも通用するのか再確認できます。メンバーにも違うやり方を学ぶ場として客演を勧めています。

橋口 私は音楽家と交流する機会が多くて、音楽家たちはアフリカだったり、インド音楽だったり。自分の足で旅した国の音楽性を持って帰るんです。それぞれが個性的な音楽を持っていて、一緒にやっている」と面白いですし、新たな表現を生み出す勉強にもなっています。

プロフェッショナルと表現が両立できる場所に身を置くこと

加藤 今までの話からも、今後、北海道という土地をどう捉えて、どのようなスタンスで活動しているかと思っているのかな？

南参 理想は、青森の「弘前劇場」や北九州の「飛ぶ劇場」のように、みんなが地域で働きながら面白い芝居を創れるような劇団を目指せたいいな。

弦巻 全員がプロになるにはマーケットとして、まだ成立していないと思うんです。そうした中で劇団を継続させて、良質な作品を創り続けるには定職を持つて活動していけるプロトモデルにならなくてはと考えています。

橋口 価値基準が芝居で食っていくことから、いかに続けられるかに変わってきたんだと思います。以前は東京に出てプロになる選択肢しかなかったけれど、全国に視野を広げてみると、もっとほかのプロ・アマ以外の方法論があることが分かったんですよね。

南参 もちろん「TEAM NACS」のように知名度を上げ全国で活躍するのも一つの道です。一方で、道内で活動を続けていける方法も形づくって、演劇以外の人たちにも見せていくことが、これからの若い劇団、そして自分達に対しても大事なんだ

南参 劇作家・演出家・俳優 / [yhs]代表
http://yhsweb.jp/

1997年、札幌市内の高校演劇経験者を中心に「yhs」を旗揚げし、ほとんどの脚本・演出を手掛ける。劇団以外でも2002年、2005年、2007年と「教文演劇フェスティバル」でワークショップ講師を歴任。NPO法人コンカリーニョ主催の「札幌福岡演劇交流プロジェクトMeets!2007」では福岡の演劇人と脚本共作プロジェクトを実施。2009年もその続編となる「札幌福岡演劇交流プロジェクトMeets!2009」に参加し、2010年3月に福岡市で上演予定。

公演予告
■札幌福岡演劇交流プロジェクト
Meets! 2009公演「タイトル未定」
2010年3月5日(金)～7日(日) (福岡公演)
3月22日(月・祝)～24日(水) (札幌公演)
詳細は劇団HPにて随時発表
http://yhsweb.jp/



「しんじゅうおへや」
シアターZOO
(2009年7月)

橋口幸絵 劇作家・演出家 / 「劇団千年王国」代表
HASHIGUCHI Yukie
http://sen-nen.org/

東京生まれ。幼少期を宮崎県で過ごし、現在は札幌在住。酪農学園大学在学中に演出家デビューし、1999年に「劇団千年王国」を創立。以後の全作品の脚本・演出を担当する。これまでに2005年度札幌市民芸術祭奨励賞、「若手演出家コンクール2005」最優秀賞&観客賞、さらに「遊戯祭07」で最優秀賞を受賞。「札幌福岡演劇交流プロジェクトMeets!2007」では福岡市で「イザナキとイザナミ～古事記一幕～」を上演し、2010年1月には10周年記念「廣作者」を大阪市で上演する。

公演予告
■トリビュート!千年王国!!「星空発電所」
(intro)・「COLORS」(ブラスマニア)・「廣作者」
(劇団千年王国) 2009年11月5日(木)～23日(月・祝)
生活支援型文化施設コンカリーニョ
■「廣作者」大阪公演 2010年1月30日(土)～
2月1日(月) http://sen-nen.org/



「廣作者(ガンサクモン)」
日食倉庫コンカリーニョ
(2002年5月)
撮影:星野麻美



と思っています。

橋口 バランスですよ。東京ほどプレッシャーのかけり方がつくはないけど、かといってプレッシャーがないわけでもない。そうしたプロフェッショナルと表現が両立できる場所に身を置くことが重要なんです。

弦巻 劇場・ホールをはじめとするハードの状況やまちの文化のあり方、身の処し方も含め、道内にはそうした環境が整ってきていると思います。

橋口 民族音楽学者の小泉文夫さんが「すべての芸能はコミュニケーションのために行われている。最も有効な形は輪になること」とおっしゃっていたのですが、その輪を自分達の世代が新たにたたくって、そして輪の外でチャレンジして、新しい創り方を身につけ、そしてまた戻っていくような芝居を道内で創っていったら最高。

弦巻 公演自体のあり方も考えていて、例えばドレスコードがあったり、ドリンク付きでフカフカのソファで観劇できたりというのもやってみたいですね。チケットは高くても、そうしたゴージャスでメモリアルになる一度かぎりのお芝居上演形態があっても楽しいと思います。

橋口 北海道に来てもらうという意味では、野外で一日中お芝居をやっているフェスティバルを開催するのもいいですね。

会場協力

ターミナルプラザ ことにPATOS

札幌市西区琴似1条4丁目
地下鉄琴似駅B2F
TEL.011-612-8383
<http://www.concarino.or.jp/patos/>



加藤浩嗣
KATO Hirotsugu

北海道新聞記者／劇評ブログ「シアターホリック」主宰
<http://ham-pro.seesaa.net/>



釧路市生まれ。1988年北海道新聞社入社。東京での大学時代に大野一雄や「状況劇場」、「第三舞台」、「転形劇場」、「夢の遊眠社」などを見て、舞台芸術の魅力に目覚める。2000年9月から2004年6月までの北海道新聞社文化部在籍中、演劇評や映画評を執筆。ダンスなども含む年間最多観劇数は2003年の244本(映画除く・同一演目の複数観劇含む)。現在も年間120本程度の観劇を続ける。2006年2月から劇評ブログ「シアターホリック(演劇病)」を主宰。

弦巻啓太
TSURUMAKI Keita

劇作家・演出家／「弦巻楽団」代表
<http://www.t-gakudan.com/>



2003年に「弦巻楽団」を旗揚げ。「血の通った豊かな作品づくり」をモットーにこれまで9作品を上演している。2007年には東京の「こまばアゴラ劇場 冬のサミット」に参加し、「エブリシング・マスト・ゴー」を上演※。2008年度より「シアターZOO」のフランチャイズ劇団となる。ほか、2009年のシアターZOOの演劇祭「2009」プロデューサー、北海道文化財団の文化創造支援事業「演劇ワークショップ」の講師(滝川市)としても活躍中。

北海道文化財団 文化交流事業

舞台芸術分野(音楽・演劇・舞踊等)で活動している道内の文化団体等が、道外または海外で行う公演等、および道外・海外において舞台芸術分野で活動している文化団体等を北海道に招へいし、道内の文化団体等と交流を行う公演等を助成しています。

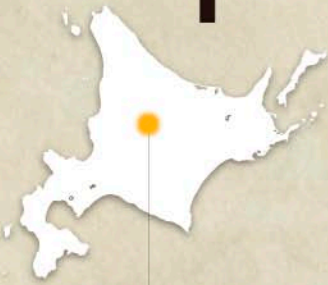


公演予告

■弦巻楽団 #10「十二月組曲」
2009年12月3日(木)～8日(火) 全7ステージ
扇谷記念スタジオ シアターZOO
作・演出／弦巻啓太
出演／弦巻楽団オール・スターズ
<http://www.t-gakudan.com/>



弦巻楽団#8
「子供のように話したい」
シアターZOO
フランチャイズ劇団公演
札幌劇場祭
Theater Go Round 2008
参加作品
(2008年12月)



東川町・剣淵町

北海道立旭川美術館学芸員

■土岐美由紀

「君の椅子プロジェクト」

今年6月、「君の椅子」第4番目のモデルの記者発表が道立旭川美術館で行われ、東川町で今年1月に産声をあげた中村小雪ちゃんに真新しい椅子が贈られた。ムク材の椅子に座った赤ちゃんの堂々たる姿と見守る母親の輝くような笑顔は、地道にプロジェクトを育んできた人びとや、椅子を手がけた作家たちの熱い想いを満たすのに十



「君の椅子2009」デザイン:小泉 誠/製作:大門 巖・大門和真

「誕生する子どもを迎える喜びを、地域の人々で分かち合いたい」。旭川大学大学院ゼミからはじまったこの取り組みは、4年目を迎えます。

地域の人々から、生まれてくる子ども達に贈る「君の椅子」は、スタートした2006年は51組(東川町)、2007年は67組(東川町51組、剣淵町16組)、2008年は73組(東川町51組、剣淵町22組)の出生家族に手渡され、3年間で合計191人の赤ちゃんが町民の仲間入りをしました。

そして4年目の今年、この椅子を“居場所”の象徴に、「生まれてくれてありがとう」の気持ちを地域の枠を超えて分かち合う新たなコミュニティ「君の椅子倶楽部」が誕生します。

北海道の旭川家具地域から、思いに賛同する道内外の方々へ、広がりがつつあるこの取り組みが、子ども達の健やかな成長を願い、そして成長する子ども達が故郷をよりどころに新たな命を生み育てる、まさに、希望の輪廻となることを心から期待しています。

旭川大学客員教授 磯田憲一/旭川大学大学院ゼミ生

「君の椅子」プロジェクト 公式サイト
http://www.kiminoisu.com/



- ①「君の椅子2006」
デザイン:中村好文/製作:大門 巖
 - ②「君の椅子2007」
デザイン:伊藤千織/製作:宮地鎮雄
 - ③「君の椅子2008」
デザイン:前川秀樹/製作:向坊 明
- *いずれも北海道立旭川美術館蔵

今

今年6月、「君の椅子」第4番目の



今年最初の椅子を贈られた中村小雪ちゃん(5カ月)

分な器であった。

「君の椅子プロジェクト」は、

2006年に旭川大学大学院の磯田憲一教授(現客員教授)ゼミが「新しい生命誕生の喜びを分かち合いたい」との願いから構想。地域が新生児に「居場所」の象徴である椅子を贈るという企画で、東川町と剣淵町が取り組み、3年で191人に贈られている。道産材により毎年異なるデザインで制作され、4年目を迎えた。デザインと制作は、建築・家具デザイナーの中村好文と北海道の代表的木工作家、大門巖のコンビに始まり、伊藤千織と宮地鎮雄、前川秀樹と向坊明、小泉誠と大門巖・大門和真が順次担当。デザイナーや彫刻家と道産材を知り尽くした地元木工作家のコラボで個性的な椅子が4脚誕生している。それらは二つの町で小さな生命の日常に寄り添い、その心身の記憶に深く刻まれていくのだろう。

道立旭川美術館では、昨年、地域の優れた木工芸を紹介する「旭川圏発木工Power」展の調査で「君の椅子」に注目。3作を展覧して好評を得、当館にそれらをご寄贈によりコレクション入りした。連作は子ども用の上質な木椅子デザインの醸成に繋がり、やがて地域の美術や産業に資するだろう。同時に、精神文化への寄与も見逃せない。少子化や高齢化、子育ての母

体となるコミュニティや子どもの居場所の喪失といった深刻な社会状況の中、それを克服するシステムとシンボルとしての「木椅子文化」創造の試みは無類のものだ。この小さなプロジェクトに国内有数のデザイナーらが参加する所以であり、中央メディアの注目も高い。ゆたかな自然と木工産業という地域の個性に根ざした懐深い文化の醸成をめざすプロジェクトは、北海道発のちよつと誇らしい企てといえる。

今年「君の椅子」のコンセプトの一つは、「いつでも一緒」。まだ座れない赤ちゃんの授乳時にお母さんが座り、子どもが椅子やお絵描き机とし、長じては踏台や玄関用椅子として使える。幼い頃の思い出と一生つきあえる心憎いデザインだ。デザインとは眼に美しく機能的なモノを生み出すだけのものではない。モノを通してのゆたかな生き方の提案でもある。小泉さんのそんな想いを見事に具現化した大門巖・和真さん親子の創造力にも拍手を贈りたい。なお、和真さんは自ら作った椅子が我が子に贈られる幸運な父となる予定。聞いただけで幸せになる。

プロジェクトは「まだまだ進化する」と感じた4年目の記者発表。その行く末を日本中に注目いただきたいと思う。





オペラハウス



やまびこ座ユースクラス公演「釣女」



やまびこ座ユースクラスと義太夫



「人形劇回入りっこ」とお客さん



ワークショップ「人形浄瑠璃」

やまびこ座派遣団は総勢24名で、やまびこ座人形浄瑠璃ユースクラスの中高中生12名、その指導者八王子車人形の西川古柳家元、義太夫、三味線、札幌の太鼓グループ新芸能集団乱拍子の若手、札幌のプロ人形劇団入りっこ、サポートしてくれたさっぽろ人形浄瑠璃芝居あしり座、通訳、そして引率のやまびこ座職員で構成した。同行した大人はアーティストの側面と子どもたちの育成の両面に熱意を持つ人ばかりである。札幌の文化の紹介ではなく、札幌のアートによる人材育成のサポート体制の厚みを伝えたいと考えた。

バクストンには7日間滞在し、市内唯一の本格的なドラマシアターである600席のバクストンオペラハウスで日本の伝統人形劇の夕べで車人形ユースクラスの共演の2プログラム、ビクトリア王朝時代からの歴史をもつホテルの地下に作られた40席の小ホール「パーパーズ・ピット」での人形劇団入りっこの英語による公演、乱拍子

の太鼓の野外公演のほか、日本文化のワークショップでは6時間で、江戸芸かっぱれ、義太夫、伝統人形、太鼓、折り紙、伝承遊びなどを楽しんでもらった。実に濃密な7日間だった。我々以外の公演がオペラハウスで2プログラム、パーパーズ・ピットでの9回開催された。

バクストンとの交流は2005年の初渡英、2007年の初来日に続き3回目である。この交流は単なる文化交流ではない。イギリスと日本（札幌）相互のアートによる子どもたちの人材育成を確認し、刺激しあう場であると考えている。2011年にはバクストンの青少年も参加し札幌で『国際アートキャンプ』を開催する構想が固まりつつある。そんな覚悟を決めさせてくれたイギリスの日々に感謝している。

天
候不順で冷夏が心配されている北海道だが、今年のやまびこ座の夏は熱く忙しい日々だった。北海道でいえば美瑛町のような町中が公園のように美しいイギリスのダービシャー州バクストン市で開催されたバクストン人形劇フェスティバルへの参加である（7月28日出発、8月5日帰国）。この派遣は、やまびこ座の指定管理団体である（財）札幌市青少年女性活動協会の創立30周年記念事業として実施され、北海道文化財団からも助成を受けた。改めて感謝したい。

やまびこ座派遣団を招待し受入れてくれたのはバクストン市のフアンワンダーという市民団体である。この団体は「アートの力」を青少年の育成に生

かす目的で活動し、アマチュアの影絵人形劇団の主宰者でもあるクリス&ダグ・アグニュー夫妻を中心に、大人たちと地元の7歳〜20歳の青少年で構成されている。今回、派遣団をホームステイやB&B（朝食付き民泊）をさせてくれたのもフアンワンダーの大人たちであった。行政や文化施設が中心ではなく、子育てに関わる市民団体が主催している人形劇フェスは、日本では例がない。ダービシャー州などからの支援はあるものの、イギリスを代表する人形劇フェスティバルを市民団体が単独でやり続けていることは驚きである。コミュニティアートの先進国の事例として日本でも学ぶ点が大いにありと考えている。



英国
バクストン市

札幌市

札幌市こどもの劇場
やまびこ座
館長

岩崎義純



パーパーズ・ピットの客席の様子

町全体が公園のように
美しいバクストンの町並みバクストン国際人形劇フェスティバル
2009パンフレット

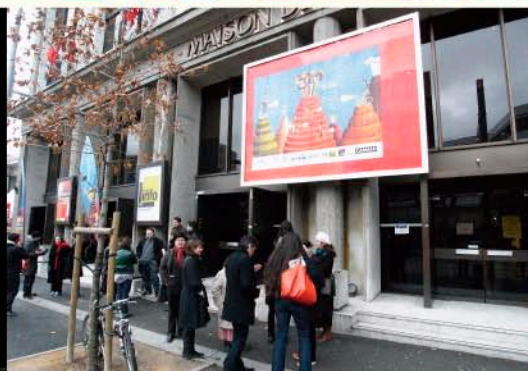
文化交流事業

札幌市こどもの劇場やまびこ座
バクストン国際人形劇フェスティバル公演

バクストンの熱い夏



世界最大の短編映画祭「クレルモンフェラン国際短編映画祭」の受賞式の様子



8日間で13万人の来場者を誇る「クレルモンフェラン国際短編映画祭」のメイン会場の入り口

素晴らしき短編映像の世界 [2]

短編映像のフェスティバル

久保俊哉 KUBO Toshiya

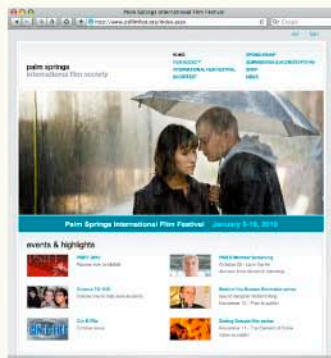
- メディアプロデューサー
- SAPPOROショートフェスト実行委員会プロデューサー

欧米では短編映画が確立されたカテゴリーとして存在し、世界最大の短編映画祭「クレルモンフェラン国際短編映画祭」や北米最大のショートフィルムマーケット「パームスプリングス国際短編映画祭」などショートフィルムの映画祭は大きな物でも100以上もあると言われています。日本でも「札幌国際短編映画祭 (SAPPORO ショートフェスト / SSF)」以外にも、アジア最大の短編映画祭「ショートショートフィルムフェスティバル」などが開催され、若い才能が育ってきています。

世界最古の国際映画祭はイタリアのベニスで毎年9月に行われる「ヴェネツィア国際映画祭」で、1932年から行われています。また有名な「カンヌ国際映画祭」「ベルリン国際映画祭」とあわせて世界3大映画祭と呼ばれています。国内では「ゆうばり国際ファンタスティック映画祭」や「東京国際映画祭」「広島国際アニメーションフェスティバル」「山形国際ドキュメンタリー映画祭」などが一般的には知られていますが、国内では上映会を主体としたものが中心です。

しかし、よく知られるカンヌ映画祭やベルリン映画祭の役割としては、映画、映像の製作者の発表の場のみならず、作品の売買の交渉の場であり、売り込みの場として、とても重要な場です。また国をあげてのステイタスの高い文化装置でもあります。そして、監督や映画製作者たちからはリスベクトされる大事な存在なのです。

札幌国際短編映画祭 (SAPPORO ショートフェスト / SSF) は作品の売買を目的としたマーケットを有した映画祭です。また国際コンペティションでは、国際審査員として半数を海外からの招聘で行っています。こういった映画祭では、新しい才能に出会う最も有効な場として世界中のバイヤーが集まります。そして、若い才能が世界に大きく育って行く場でもあります。また、SSFからアカデミー賞などにノミネートする作品、監督も出てきています。このような映画祭には世界中の優秀な作品や製作者が応募し、参加してきます。このような理由で、SSFには4年間で120カ国、約1万の作品が集まっているのです。また、「クレルモンフェラン (Clermont-Ferrand) 国際短編映画祭」は延べで15万人が参加する世界最大の短編映画祭です。SSFはこのクレルモンフェランとの連携し



パームスプリングス国際短編映画祭 <http://www.psfilmfest.org/>



クレルモンフェラン国際短編映画祭 <http://www.clermont-filmfest.com/>

アジアと世界をつなぐ架け橋となっています。また、ここには世界中から映画祭関係者も多く集まり、年に1回の国際会議を開いています。International Short Film Conference (ISFC) という世界中の短編映画祭をネットワークする団体にSSFも2008年から加盟し、アジアの代表を務めています。このように日本を代表する国際映画祭としてSSFは位置づけられ、世界から注目を集めるまでになっています。SSFには現在34の短編映画祭と27の団体が加盟しています。 (<http://www.isfc.com.au/members.htm>)

このような映画祭の持つ意味は大きく、映像作家や監督が才能の種だとすると、映画祭はさしずめ苗床でしょうか。それをささえる観客や都市が、畑であったり土であったり、その種を



「Pärmsprings国際短編映画祭」
マーケットブースの様子



ISFCの会議 (手前は事務局長の本間貴士さん)



育てる土壌と見に来てくれる観客（肥料や水）により、その映画や作家は育つのです。短編の映画祭は、創り手と観客が近い映画祭といわれています。いきなり長編を撮れる監督はいません。

ハリウッドで活躍する有名監督も皆、8mmフィルムなどで製作した短編映画からスタートしています。また、現代では8mm時代と違ってかわり、HDのビデオカメラとパソコンで、プロと同様の映像を安価で制作する事ができます。エレキギターの登場で、音楽が一気に大衆化したのと近い現象が、映像分野にも訪れているのです。

その時のフォーマットとしては2時間の映画をいきなり作るのには難く予算もかかります。短編映画は若手の映像作品のフォーマットとしては最適な物となり、そしてその発表の場として、国際映画祭でのデビューというのが、若い映像制作者たちには大きなステップとなります。そして世界の短編映画祭はネットワークされているので、ここでの評価がそのまま世界評価に繋がって行く訳です。

ヨーロッパでは映像理論が義務教育の国もあると聞いています。小学校あたりからモニター・ジュリ理論※を習い、映像をひもとく力もつけ、国際映画祭で世界中の優れた作品に触れあう。その事でまた新しい才能を育んでいく。まるで自然のサイクルの様に、映像作家の才能の種が、土に落ち、花を咲かせ、実を付け、また種を落とします。そんな循環の中の花を咲かせる晴れの舞台。それが映画祭の役割なのかもしれません。

映像教育については次回をお楽しみに！

過去4年間で、120の国と地域から約1万作品がSAPPOROショートフェストへ応募されている





ハレルヤ農産

住所/当別町弁華別73-1
Tel./0133-23-2775
営業/8:30~19:00(レストランは12:00~17:00)
定休日/木曜(レストランは水・木曜、冬期休業)
<http://hareruya-nousan.jp/>



ハム・ソーセージ職人 松田 進さん
Susumu Matsuda

のどかな田園地帯の真ん中で、26年前から無添加の手作りハムとソーセージを作り続けている「ハレルヤ農産」。代表の松田進さんは、生まれ育った当別町で養豚業を営んでいましたが、「生産から加工までを一貫して手がけたい」と、先進の養豚技術を学ぶためデンマークへ。そこで加工技術も習得し、帰国後は養豚業のかたわら、ハムソーセージ作りにも挑み始めました。抗生物質を排して無菌状態で飼育するSPF豚の生産にいち早く乗り出しましたが、「二束のわらじを履くことに限界を感じていたといいます。」

ちょうどその頃、SPF豚の養豚家が近郊で農場を始めたのを機に、そこから豚を仕入れ、12年前からは加工業に専念。工房2階にはファームレストランをオープンしました。「SPF豚は肉質がきめ細かくて脂の質も良い」と松田さん。素材の持ち味を生かすため、着色剤や防腐剤は一切使わず、味付けは天然塩と独自にブレンドした香辛料のみ。長時間熟成させた後、ナラやシラカバナなどの道産木のチップで薫煙して仕上げます。肉本来の甘みがギュッと詰まった松田さん手作りの味は、クチコミで人気を呼び、今ではファンの輪が全国に広がっています。

信念を貫き独自の味を探究しつつも、「いつかまた養豚業を始めたい」と、前を見据える松田さん。デンマークに思いを馳せ、故郷に根ざした夢の灯は、まだまだ燃え尽きないようです。

1. 直売店での接客もこなすという松田さん。やわらかな物腰に人柄がにじみ出る
2. ベーコンや生ハム、フランクフルトなど約20種類の商品を製造・販売
3. SPF豚の生肉を一本一本手作業で丁寧に認め詰めていく



ディジュリドゥ奏者 ABO(アボ)さん
Abo

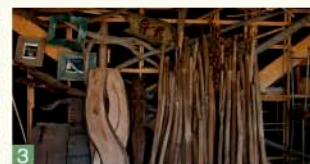
弦をつまぶくかのような音色と深い重低音が織り重なって響きわたる。初めて耳にする不思議なリズムを放つのは、日本のディジュリドゥ奏者の草分け、ABOさん。これはオーストラリアの先住民・アボリジニの民族楽器で、シロアリに食われて筒状になったユーカリの木で作られたユニークな管楽器です。

ディジュリドゥとの出会いは16年前。当時、東京の高円寺でライブハウスを経営していたABOさんは、創業20周年を記念してオーストラリアへ長旅に出ました。「道端でアボリジニがこれを吹いていて、自由で素朴な音色にほれた」という。さっそく奏法を習い、帰国後、本格的な演奏活動をスタート。さ

アボリジニの民族楽器を田園に響かせて

まさまなジャンルのミュージシャンたちとセッションを重ねてきました。当別町に移り住んだのは平成19年。「何十年も地下のライブハウスに潜っていたからね(笑)。自然に囲まれて人間らしい暮らしをしたいと思って」。移住後も演奏活動を続ける一方、当別町を音楽で盛り上げようと、ライブやイベントの開催も手がけています。

そして、近所の森で見つけた「エゾニユウ」というセリ科の植物と出会ったのです。立ち枯れた茎は硬く、中は空洞。「試作して吹いてみたら、予想以上にいい音が出た」。ABOさんが吹く北海道版ディジュリドゥの音は、初めて聞くのにとこか懐かしく、胸に響きました。



1. 息を切らさず演奏する循環呼吸を使い、唇の動きや声の振動で自在に音を操る
2. 山西洋輔や近藤尊則などそうそうたるミュージシャンとも共演してきたABOさん
3. エゾニユウの枯れ茎。「直径や高さの違いで微妙に音が変わるのが面白い」という

ABO Didgeridoo Magic

住所/当別町弁華別84-3
Tel./0133-23-4112
<http://www.didgeridoomagic.com/>

石本 留美子さん [当別町商工会女性部代表]
ISHIMOTO Rumiko

美幌市生まれ、当別町育ち。「当別に来ないと食べられない名物を作ろう」と、地元で昔から愛されてきた郷土料理「いもだんご汁」を、冷凍食品として商品化。白玉状のイモもちのほか、ニンジンやゴボウなど、食材はすべて当別産でまかなう。そのおいしさが評判を呼び、現在、販売数は年間1万食を超えるヒット商品に。2003年には、「商工会女性部 主張発表全国大会」に北海道・東北ブロック代表として出場し、「最優秀賞」を受賞。

大城 康子さん [乗馬クラブ代表]
OSHIRO Yasuko

神奈川県生まれ。乗馬クラブ「石狩ホーストレック」代表。夫とともに横浜市から当別町へ移住。石狩川左岸にある敷地で、サラブレッド、ポニーなど13頭を飼育。北海道アウトドアトレイルライディング認定ガイドとして、会員や観光客の受け入れを行う。2008年10月には、道央圏では初めてとなる馬術大会「石狩川エンデュランス馬術大会inとうべつ」(石狩川エンデュランス馬術大会inとうべつ実行委員会主催)が、石狩ホーストレックを発着点として開かれた。

清水 しおりさん [陶芸作家]
SHIMIZU Shiori

札幌市生まれ。札幌大谷短期大学美術科を卒業後、北海道工業試験場野幌分場で陶芸を学んだ後、愛知県常滑市の現代陶芸作家・鯉江良二氏のアトリエで住み込み修業を積む。1994年、当別町の西外れに位置する獅子内に移住し、築窯。江別の陶土を使い、ポップな印象の普段使いの器や、独創的なオブジェなど幅広い作品に取り組む。

須田 修司さん [木工作家]
SUDA Syuji

長野県生まれ。大手カメラメーカーに勤務後、木工の世界へ。2005年、札幌で「家具工房旅する木」を設立。その後、当別町の旧東裏小学校に工房とギャラリーを移し、創作活動に取り組んでいる。流行に流されず、飽きのこないシンプルなデザインの「一生使える」家具づくりを目指す。家具をメインに、トレイや時計などの小物類も手がけ、いずれも木肌の風合いにこだわっている。木育活動グループ「木育ファミリー」会員。

中野 政幸さん [当別町文化協会会長]
NAKANO Masayuki

当別町生まれ。「当別町文化協会」の理事を経て、2003年より同協会会長に就任。町内の文化・芸術活動を支え、リードしてきた。毎年11月に開催する「当別町文化祭」では、民謡や詩吟などの舞台発表、手芸や書道、写真などの展示会をプロデュース。北海道教育委員会の講師の登録制度「100人バンク」のメンバーとして、野外活動やクラフト作りの指導にあたる。北海道青少年自然体験活動指導者の団体「クマゲラの会」会長。

堀江 三千代さん [当別子ども図書館代表]
HORIE Michiyo

当別町生まれ。公共図書館がなかった当別町に、1987年、家庭文庫「当別子ども図書館」を創設。築100年ほどの古い実家を利用し、11名のボランティアスタッフとともに活動をスタート。オープン前には地域の母親たちと講師を招き、5年かけて「子どもの本」についての勉強会を開いた。現在は世代交代したスタッフが年5回、講師を招いての「語り」やワークショップ、読書キャンペーンなどを開催。子どもが本と出会い、楽しめる場所として地域住民から親しまれている。

人から人へ。一人から大勢へ。アートや生活文化の可能性は、人を通して無限に広がっていきます。地域の文化を支えているさまざまな方たちをとらえて北海道各地の文化を紹介します。

文・葛西麻衣子 / 写真・亀畑清隆



ガラスを通してスウェーデンの魅力を伝える

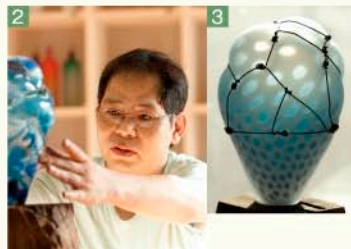
ガラス工芸作家 **甲斐 裕士**さん
Hirosi Kai

北歐型住宅がゆったりと建ち並ぶ街並みは、まるでヨーロッパのよう。当別町の丘陵地に広がる「スウェーデンヒルズ」は、森に守られた閑静な住宅地。この町は、気候風土がよく似たスウェーデン・レクスサンド市と姉妹都市提携を結び、さまざまな分野で交流を深めてきました。昭和61年に開設されたスウェーデンヒルズ内の交流センターはガラスや木工の工房を備え、文化交流の核を担っています。

作家をインストラクターとして招いており、「本場で活躍するさまざまなタイプの作家から直接指導を受けられたことが、とても刺激になりました」と甲斐さん。現在は、交流センターのギャラリーで販売する作品を手がける一方、オブジェなどオリジナル作品の創作にも力を注いでいます。

「当別の四季の移ろいが好き。森や田園を眺めていると、自然とイメージが膨らみます」。新作シリーズ「BOND」は、青い空やキノコなど自然がモチーフで、やわらかなフォルムと色合いが印象的。「ガラス工芸作家としては北海道生まれ」と笑う甲斐さん。今日も森の工房で、この地だからこそ生み出せる表現を探っていることでしょう。

1.赤々と燃えるガラス球の形を整えていく。一瞬たりとも気が抜けない 2.スウェーデンガラスは「シンプルなデザインと色遣いが魅力」と話す甲斐さん 3.グラールという特殊な技法を用いたオブジェ「BOND」



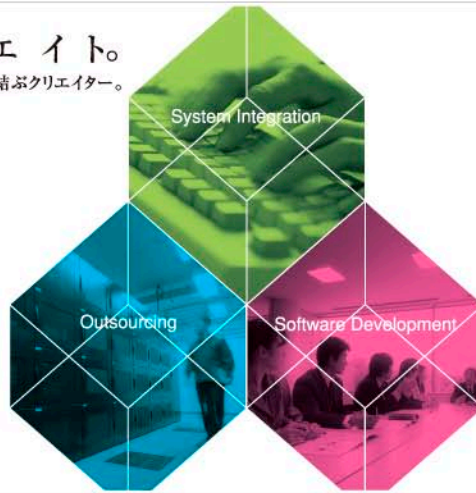
住所/当別町
スウェーデンヒルズ
ビレッジ2-3-1
Tel./0133-26-2360
営業/10:00~16:30
(12~3月は~16:00)

定休日/火曜、12~3月の祝日、年末年始
<http://www4.ocn.ne.jp/~sweden/>

スウェーデン交流センター ガラス工芸工房

ITで未来をクリエイト。

私たちHBAは、お客様とお客様の未来を先進のITで結ぶクリエイター。



3つの事業をリレーション。

最適な情報システムの提案、構築、運用を
万全のセキュリティで総合的にを行います。

●システムインテグレーション事業
求められるニーズに対し基本設計から保守に至るまで総合的なソリューションを行います。

●アウトソーシング事業
万全のセキュリティ対策で、お客様の事業における情報化投資の削減をサポートします。

●ソフトウェア開発事業
プロジェクトマネジメント力を生かし、確かな品質と最先端の技術力を提供します。

HBA 株式会社 HBA

〒060-0004 札幌市中央区北4条西7丁目1番地8
TEL.011-231-8301 FAX.011-281-0915
<http://www.hba.co.jp/>

Haydn2009

2009.11/29(日) 15:00開演 / 大ホール
アダム・フィッシャー指揮
オーストリア・ハンガリー・ハイデルン・フィルハーモニー
トランペット / ハンス・ガンシュ
【全席指定 (税込)】 S8,000円 A6,000円 B4,000円 学生B1,500円

2009.12/20(日) 17:00開演 / 大ホール
Kitaraのクリスマス
指揮 / 井上道義
ダンス / 真田久美子・堀内 充
管弦楽 / 札幌交響楽団
【全席指定 (税込)】 S5,000円 A4,500円 B4,000円 C3,500円 D3,000円

【お問合せ先】 Kitaraチケットセンター TEL 011-520-1234



Sapporo Concert Hall
札幌コンサートホール

Kitara Club

新会員募集中



札幌コンサートホール [Kitara Club 事務局]

札幌市中央区中島公園1-15

TEL 011-520-2580 [10:00~18:00]

(休館日を除く) ※毎月 第1・第3月曜日は原則休館日

<http://www.kitara-sapporo.or.jp>

オフィス環境サービス



OA機器、パソコンの導入、オフィス家具、
ICT関連システムをはじめ、貴社の業務内容・
ニーズにあわせたトータルコーディネートを行います。

オフィスサプライサービス

コクヨ・プラス・ゼブラ・ペンテル・三菱鉛筆・ウチダ
パイロットなど主要メーカー各種を取扱っております。

プロバイダサービス



ホームページ作成、WEBシステムの作成・導入、
ホスティング、接続はダイヤルアップ、ISDN、
ADSL、Bフレッツまで対応。
ネットワーク配線、設定、サポートなど、
インターネットに関わる全てを一括で行うことが
できます。



取扱品目

- OA機器全般の販売、レンタル
【コピー機、ファックス、パソコン等】
- オフィス関連商品の販売
【オフィス家具、文具、OAサプライ、カウネット・R@SSNET (通販)】
- プロバイダ事業
【レインボーインターネット】
- マルチメディア関連機器の販売
- ネットワークシステム、各種業務用パッケージソフト販売
- 各種環境関連製品販売
【光熱源強力脱臭機、ゴミ圧縮機、生ゴミ処理機】
- 福祉機器関連商品の販売
- ONTT商品取次
- その他、オフィス・施設の環境をよりよくする一切の事業

ISO14001、ISMS認証取得企業

知的 創造的 オフィス 創りで貢献する

サンコー事務機株式会社

〒060-0013 札幌市中央区北13条西18丁目36番90

TEL:011-614-2255 FAX:011-614-5245

Home page: <http://www.sancoh.gr.jp>

e-mail: info@sancoh.gr.jp

お気軽にご相談ください。

HOKUSEN
CARD

ひとりひとりの、いまと、つぎへ。



<http://www.hokusen.jp>

株式会社 ほくせん

本社 / 札幌市中央区南2条西1丁目 北専ビル
TEL (011)261-6101

HOKUSEN
MY CARD
PROJECT!

あなたの一枚、をめぐして。